

カトリック京都司教区
ブロック担当司祭、協力司祭、宣教司牧協力者
小教区評議会役員各位

2021年小教区評議会役員研修会報告

2021年6月18日

福音宣教企画室

- テーマ： サイクルテーマ①「教会と福音宣教の理解」
「コロナ禍における信仰と福音宣教」
- 対 象： ブロック担当司祭、協力司祭、宣教司牧協力者、小教区評議会役員
- 講 師： 大塚喜直司教、一場修神父
- 日 時： 2021年5月29日（土） 14：00～15：30
- 開催方法： ZOOM ミーティング
- 参加人数： 約 100 名、92 端末（信徒 79 名、修道者 3 名、司祭 18 名）
※zoom 画面での確認のため誤差があります。
- 内 容： 〈事前に大塚司教動画講話を視聴〉
司教導入、一場神父コメント、全体での分かち合い

大塚司教導入

役員研修会の意味と構成についてあらためて伝えたい。役員は、司祭者チームとともに教会運営のリーダーシップチームとして働く人たちであり、特に短期・長期計画を考える際、いま社会の中で何が起こり、どういう状況の中で教会活動を具体的に行っていけばいいのか原案を考える人である。そしてそのために必要な基礎的な心構え、アイデア、教会についての認識などの共通理解を持つことができるように役員研修会を行っている。研修会は3年周期で3つのテーマを繰り返しているが、どれも同時に考えていくテーマである。事前ビデオで語った3つのポイントでは、1、出向いていく教会—この言葉の中に、「教会とは何か」「福音宣教とは何か」また「外に向かっての視点」が含まれている。2.すべてのいのちを守るため—教会が何か月にもわたってミサをしないという大きな決断を実行していることは、すべての人の健康を守り、社会全体の医療的負担を軽減するためであり、ここにも教会の集いのあり方と社会とのつながりが含まれる。3.コロナ時代の信仰を生きる（年頭書簡）—いまの現実をどのように信仰をもって受け止めるか、そしてコロナ禍によって変えさせられたこと、新しく得た視点をもって次の共同体づくりと社会への福音宣教へと歩むための積極的な時間としてこの時期を過ごしたい。

一場神父コメント

大塚司教の講話を聴かせていただき、いくつかコメントを申し上げたい。

小教区活動の3つの領域*について、教会に集うことができない私たちは、今まで教会に来られなかった人たちや様々な事情で教会から離れている人たちと同じ条件に置かれている。また教会に所属していない人たちとはコロナ禍という共通体験を私たちは持っている。同じ困難を体験し、共通のものを得た私たちの中から何か新しく始まらないかと感じた。次に、教皇フランシスコは「出向いていく教会」の中で、自分にとって快適なところから出ていかなければならないと言っている。私たちのいるところはコロナ禍によって必然的に快適な場所ではなくなり、新たな宣教の場が私たちの日常生活になっている。自分にとって快適ではない場所でわたしたちはどう福音を生きたらいいのかを考えさせられた。今教会は「すべてのいのちを守るため」にミサを休止しているが、いのちにはさまざまな側面がある。そして同じ教会の中でも、さまざまな立場の人がいる。ミサを休止して欲しくない人、信徒の生命を守るためにミサを休止しなければならない立場の人がいる。どれが正しいというのではなく、どれも大切な考え方である。「すべてのいのちを守るため」とは、それぞれのいのちの捉え方を大切にしようということではないか。だからいのちにはさまざまな側面があることを忘れないようにしたい。

ミサができないことは辛い、ミサがなくても共同体が今存在して、支え合って祈り合っている現実があることを心から感謝したい。キリストは生きておられ聖霊が働いていることを実感している。だから苦しい思いもあるが、感謝と希望がある。そして最後にやはりみなさんへ感謝を伝えたい。

*小教区活動の3つの領域 ①普段、通常の教会活動に参加する(できる)信徒、②教会から離れた信徒や、しばらく教会活動に参加していない信徒、③社会の中で、キリスト教信仰を求め人

全体の分かち合い

あらかじめブロック・小教区でできる方法での分かち合いをしてもらい、当日は特に伝えたいことなどをシェアしてもらった。多くのブロック・小教区で会議をオンラインで行ったとの報告があった。感染防止対策に関しては、参加者や役員の負担を軽減するための消毒方法の見直しや新たな取り組み、また訪問ができない高齢者へのフォローについて伝えられた。パソコンなど情報機器の利用が困難な人への情報共有の問題も挙げられた。(まとめは3,4ページ) 最後に、医師の糸井利幸氏より今後ミサ再開の際の注意点が語られた。

福音宣教企画室振り返り

緊急事態宣言が続く中、今回の研修会は初のオンライン開催となりました。100名近い参加者にもかかわらず、幸い大きなトラブルなくスムーズに実施することができました。ご協力下さいました参加者の皆さまに感謝申し上げます。オンライン会議がかなり浸透してきていること、また参加者からは時間的負担が少なく助かるという声もあり、今後も研修会の開催方法の一つとして考えていきたいと思っております。また教区では、今後、小教区がお互いの取り組みを共有できるような場(掲示板など)を作ることも検討しています。

全体の分かち合い

京都北部)

丹後) 2016年に6小教区が一つになり丹後教会ができた。その際に規約を作成したが、まだ福音宣教のための小教区とはなっていない。6つの小さな共同体を生かしながら、内向きの教会から外向きの教会となるように教会共同体を考え直さなければならない。

ミサの準備をする若い人が少ない上に、病院や施設に勤める人は職場から人が集まる場は控えるように言われていたりするので、さらに負担が増える。ミサ再開についても温度差がある。

洛東)

桃山) 特に独り住まいの高齢者が不安やさみしさを感じているのではと話し合った。「聖書と典礼」など印刷物を郵送するだけではお互いの存在を感じることができない。個人あてのメッセージをつける、返信ハガキを同封し近況を知らせてもらうなどお互いの顔が見えるような方法を検討している。

洛北) WEBでブロック会議を行った。内容はコロナに対する対応について。

衣笠) 訪問ができない人への連絡をどうするかについて話し合った。

北白川) 昨年3月から毎週日曜日 ZOOM オンライン教会学校を行っている。神父による福音朗読、クイズなどを行っている。参加人数に波はあるがつながりが持っている。

京丹) ZOOMでブロック会議を行っている。

役員研修会に向けて小教区で分かち合い、ブロック会議で話し合うという形をとった。

[分かち合いの報告] 小教区の役員とブロックの役員の位置づけでは話がかわるのではないかとの意見があった。[年頭書簡の分かち合い] 希望と信仰と愛の抗体を持つ、どんな困難な現実も受け入れ、キリストの約束を信じ愛の力で様々な課題を克服していく、互いに足を洗うという命令は愛の実行と関わっている、社会の中で野戦病院としての教会の役割を果たせるよう、教会の外に向かう力と恵みをいただく、コロナ禍にあってこそ個人も共同体もエコロジカルな回心への呼びかけに応え、神から託された使命を重く受け止める、という分かち合いがなされた。

長岡) 役員会、評議会を ZOOMで行っている。メール・電話・FAXだった連絡方法を、メールに一本化した。ネット環境のない人には郵送している。ベトナム人にはグループ LINEで連絡している。コロナ禍のような事態は今後もほかの形でも出てくる可能性がある。新しいやり方を考えていく時代、と前向きにとらえている。

滋賀)ブロック会議ができない状況。小教区評議会では共同宣教司牧が自分たちにテーマとして与えられているのでは、という意見がでた。

奈良)個人的見解だが、いかに信徒に平等に情報を共有するか、平等にチャンスを与えるかということに気を遣う。ネット環境がない人、パソコンをうまく使えない人にも平等に情報を共有し、また情報を返してもらうことが非常に難しい。

三重北部)

桑名) 電話連絡網を一斉メールに変更した。それにより長文、正確な内容が伝わるようになった。電話でなければならぬ人のために電話での連絡方法も残した。

冒険だったが、ミサ参加者が後からわかるように、全員約 400 名強(滞日外国人含む)に ID 番号を付けた。入堂時に自分の ID を伝え、決められた席に座ってもらっている。入堂時の事務の簡素化(受付担当者 1~2 名)と非接触(鉛筆等に触れない)が可能になり、スムーズに動くようになった。

提案:各教会で今回のコロナ禍のなかでどのようなアクションをして成果があがったのか教区主導でアンケートを行い、アンケート結果を利用できる教会はその成果をフィードバックして欲しい。

四日市) 不定期に役員数名と神父が集まり、ミサ再開する場合、どのような工夫をして教会からクラスターを出さない、感染者を出さない、人に移さないかを徹底的に話し合っている。ミサ参加人数を更に減らす、自動消毒液噴霧器を利用するなど、人の手を煩わさずにできる対策など。ミサ中の会衆の声の制限も徹底しなければならない。司教様の文書に、特定の役員、評議員が犠牲になるようなことがあってはならないとあり嬉しかった。

三重南部)今年から ZOOM でブロック会議を実施。堅信式、コロナ下での各教会の現状などを報告、分かち合った。また毎月 1 回懇話会を開き情報交換を行っている。

教会学校は、しばらくブロックのつながりが途絶えていたが、堅信式の準備をきっかけにブロックが契約している ZOOM を使い、6 教会の担当者と協力して鶴山神父を中心に勉強会や分かち合いを行っている。月 1~2 回。参加人数は 20 人前後(大人 12 人、子ども 15 人)。堅信式後も継続したい。

津) 堅信式の実施に向けて、各教会の対応が様々なために苦労している。